
コスナーさんの思い出

高田龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コスナーさんの思い出

【Nコード】

N1732E

【作者名】

高田龍

【あらすじ】

海辺の街の丘の上に住む人もない家がある。かつてこの家に住んでいた白髪の老人の生涯をたどる物語。細やかな幸せを掴み、それを守る為に懸命に生きた彼と彼の家族、その彼等の前に立ちはだかる戦争と云う名の悪魔。幾度と無く打ちのめされるコスナーさんの人生。父親も奪い取られたコスナーさん、ついに最愛の息子迄も奪い取られてしまう。最後に心の奥にしまい込んでいた怒りと悲しみを権力に向かってぶつけるコスナーさん。彼の心の叫びを聞く時、私達が忘れかけていた平和への限らない感謝と戦争を断じて許さな

い勇気が目覚めることを信じて…。

第一章・遠い日の旅立ち

海を見下ろす小高い丘の上に、白い平屋の家が在る。

その家は、どの部屋の窓からも海を眺めることの出来る家だった。

今は住む人もなく、友人達が羨ましがった寄木造りのテラスの床は雨風に晒され朽ち果て雑草まで生えている。

家具も調度品もそのままの室内は、蜘蛛の巣があちこちに有って、主人アルジの居ない家はひっそりと静まり返り、物悲しさをいつそう掻き立てる。

この丘の上の白い家には、もう訪ねてくる人もいない。

今から、五年ほど前の事、この家の最後の住人、ロバート・コスナ―は八十五年の生涯を静かに終えた。

長い間、天候に恵まれた日には、午後になるとテラスに置いた揺り椅子に腰掛け、パイプを愉しみながら、海を眺めたり、本を読んだりする事を習慣にしていた。

なだらかな丘を上り切った処に建つその家の周りは、麦畑が広がっている。

朝日が昇る時と夕陽が沈む時と、一日に二度、麦畑は黄金に燃え上がる。

同じ色の様でも、朝日と夕陽では創りだす色は微妙に違っている。

その光景の見事さは、喻タトエ様もない。

毎日のように眺めている彼でさえ、大自然の荘厳な儀式はその度に息を呑む。

テラスの向こうは、切り立った崖が、その下の砂浜へ落ち込んでいるのだが、テラスからは見る事は出来ない。

テラスから見えるのは、何処までも続く大海原だけだ。

その碧い色は、沖へ向かって色を変え、遠く外洋の辺りは、雄々しい群青の連なりが続き、あちこちで波頭がナミガシラ白く弾けていて、特に春の季節は、海が水平線のところで空と溶け合っているように見える。海は、四季折々の表情を見せて彼を楽しませてくれたが、冬の海だけは、好まなかった。

灰色の空の下に拡がる闇のような色の海、一瞬たりとも、穏やかさを見せる事の無い海面は、怒り狂う魔物か、世界の果てにぞびえ、人間を寄せ付けない山脈の連なりのように見える。

風は凍てついて、砂粒や氷の粒が混じり合い、肌に痛い。

羽根いっぱい強い浜風を受けながら、高く低く位置を変えて、餌を探す海鳥達の姿が哀しい。

暖炉の薪がパチパチと音を立てている暖かい家の中から硝子越しのそんな風景を眺めていると、彼は幼い頃、遠い北の国から父や母と貨物船の船倉に隠れて、この国を目指した日を思い出してしまっただ。

船着場の突端で弱々しく灯るブリキで出来た外灯の笠は、強風に煽られ、カタカタと音を立てて、今にも吹き飛ばされそうだった。

猛り狂う波は、防波堤を越えて港の中へ入り込んでくる。

幌を付けたトラックの荷台に何十人もの人達が乗り込み、息を殺して彼等が国外へ逃げる為の貨物船がやって来るのを待っていた。

まだ六歳に成ったばかりのコスナーにとって、この夜の経験は鮮

烈に彼の脳裏に刻み込まれた。
軍隊や警察の目を盗んでの脱出である。
危険な命懸けの旅が始まろうとして居た。

第二章 新天地へ

何日も雨は降り続けその雨は時折、霽^{ミッレ}に変わった。

今が、昼なのか、夜なのか、何処までが空で、何処からが海なのかも判らない、雲は低く垂れ込め、その中に閃光が走り、雷鳴が轟く。

それをかき消してしまう波と風の音。

貨物船はまるで、木の葉のようだった。

外洋に出た後の波の高さは桁外れで、ビルのような、というより山だった。

その山の斜面を、密航者達を乗せた貨物船は、頂きに駆け上がったかと思うと、一気に谷底へ転げ落ちる。

その繰り返し、いつ終るともなく続き船倉に隠れるように身を潜めているコスナー一家を始めとする四〇人程の密航者達は、嘔吐を繰り返し、疲労し衰弱し、一人また一人と倒れていった。

コスナー一家が命懸けの船旅を始めた日から、三日目の朝、悲しい出来事が起きた。

密航者の中でも最年長の老婆が、疲労の極みの中で意気を引取った。九〇歳になるうかと云う老婆には始めから無理な船旅だった。

亡くなった老婆の一番の愉しみは浜辺の流木に腰掛け潮の満ちるまで、海を眺める事だったという。

厚く、低く垂れ込めた鉛色の雲の間から、幾筋もの陽光が差し、珍しく波も穏やかな日、船倉の住人達は出航以来初めて太陽を見た。そして、全員で老婆の骸^{むくろ}を海に葬ったのである。

六歳に成ったばかりの、ロバートも船上の葬儀に参列していたが、彼は知らない老婆が死んだ事よりも、久しぶりに海の空気を胸いっぱい吸い込む事が出来たことがとても嬉しく、正直なところ悲しみの感情はなかった。彼は、あの地の底のような船倉には二度と戻りたくなかった、幼い彼の願いは一日も早く土の上や、石畳や、舗装道路や、なんでも好いから、固い揺れない地面に立つ事、そしてその固い揺れない地面を思い切り走り回る事だったのだ。しかし、そのロバート・コスナーの願いを叶えるには、真つ暗な船底での生活をもう少し我慢するしかない。

ともあれ、この永遠に続くかと思われた恐怖の船旅も終わりが近づいていた。

貨物船の船長から、許可が下りて、指示された時間内に限って甲板にあがる事が許されたのは、老婆を葬ってから五日が過ぎた朝方のことだった。

『旅も終わる、やっと終わる』父親のウィリアムが、船縁ふなべり

から身を乗り出して、貨物船の横っ腹で弾けている白い波に眼をやりながら、誰に言うともなく呟いた。『いよいよ、着くのね。』

と母親のシャーロットが父の背中に尋ねる。

それが合図だとも言うかのように、甲板のそこかしこで固まっていた密航者達の中から歓声が上がる。

それぞれが死への恐怖から解放され、絶望の闇の中から希望の灯火ともしびを見つけた瞬間だった。

やっと目指す自由の国に辿り着くのだ、そう思うと、自然に身体が動きだしてしまう。思い思いの歌を口ずさみ、思い思いのリズムで、手を繋ぎ、肩を組み、足を踏みならし、陽気に踊り出すのだった。

やがて、甲板に彼等の大きな輪が出来て、皆お互いの健闘を讃えあい、生きて新天地に到着出来る幸運を、時の過ぎるのも忘れて、歡び合うのだった。

ロバート・コスナーも、大人たちの輪の中に三歳年上の姉のキャラクンと一緒に加わり、見よう見まねに踊っている。

この先、彼等を待ち受ける新天地がどのような運命を彼等に与えるのかは誰にも解らない、きっと過酷な運命が待って居る事だろう。しかし、彼等はあの凍てついた北の国から、荒れ狂う大海原を餓えと寒さと死の恐怖を克服しながら此処までたどり着いたのだ。

それを思えば、たとえどのような厳しい現実が待っていても、彼等は乗り越えて行くだろう。

貨物船の遙か前方、^{もや}靄に隠れた向こうに横たわる新天地が間もなく姿を見せるだろう。

艦橋の船長から声が掛かる。

『みんなーッ自由の女神様のお出迎えだぞーッ』

全員の視線が、船首の先の靄に^{かす}霞んでいる辺りに注がれる。

やがてゆっくりと白く霞む中から、巨大な人影が姿を現し、密航者達の間から一際高く^{ひときわ}歓声が上がる。

その巨大な人影が、あの高く^{たいまつ}松明掲げた自由の女神像だと解るまでそれ程の時間はいらなかった。

さあ、コスナーさん一家四人の新しい出発です。

その門出をそつと見下ろす自由の女神像の表情が彼等に微笑み掛けたように見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1732e/>

コスナーさんの思い出

2010年10月10日00時22分発行